

七条中学校だより10月6号

京都市立七条中学校

令和8年10月8日

発行:校長 林 秀雄

明日のリハーサルに向けて

明日10月9日は、合唱の部に向けた学年練習（リハーサル）です。今年度の合唱練習は全11回（間違っていました）。そのうち8回の練習を終え、明日のリハーサルは、これまで積み重ねてきた成果を確認する「直前発表」のような意味をもつ大切な時間です。

このリハーサルで分かるのは、音程や声量、ハーモニーといった合唱の仕上がり具合だけではありません。一人ひとりがどのような思いで合唱に向き合っているのか。歌う姿勢はどうか。クラスの雰囲気はどうか。指揮者と伴奏者は互いを信頼しているか。指揮者と歌手の心はつながっているか。これまでどのような練習を積み重ねてきたのか。そうしたものが、合唱には不思議なほど表れます。

特に2・3年生の皆さんは、これまでの経験からそのことを実感しているのではないのでしょうか。合唱は、一朝一夕で完成するものではありません。だからこそ、今の段階で自分たちの姿をしっかりと見つめることが大切なのです。

明日のリハーサルをただの通過点にするのか、それとも本番に向けて大きく成長するきっかけにするのか。それは各クラスの心構え次第です。うまくいかなかったところが見つかるかもしれません。しかし、それは決して悪いことではありません。むしろ課題が見つかることこそがリハーサルの価値です。「もっとこうしたい」「ここを改善したい」という思いが生まれれば、その後の練習は大きく変わります。

本番まで残された練習回数は3回です。決して多くはありません。しかし、クラス全員が同じ方向を向き、一回一回の練習を大切にすれば、合唱は驚くほど変わります。「練習は本番のように、本番は練習のように」明日のリハーサルを、本番さながらの緊張感をもって臨んでください。そして、自分たちの現在地を確認し、本番までの残された時間をどう使うのかを考える機会にしてください。合唱の部で競うのは順位だけではありません。クラスの仲間と心を合わせ、一つの作品を創り上げる過程そのものに大きな価値があります。

明日、各学級がどのような歌声を聴かせてくれるのか、そしてどのような成長の種を見つけてくれるのかを、とても楽しみにしています。皆さんの本気の歌声を期待しています。

∞無限の可能性

先日行われた創立70周年記念式典、七中祭オープニング、そして体育の部。私はその一つ一つの場面で、七条中学校の皆さんがもつ大きなエネルギーを感じました。もちろん、競技に全力で挑む姿や、ステージで堂々と発表する姿にも強い力を感じました。しかし、それと同じくらい私の心に残ったのは、仲間を応援する姿です。大きな声援を送る人、拍手を送る人、一緒に喜び、一緒に悔しがる人。その応援のエネルギーが、競技や発表をさらに輝かせていました。

私はその熱量を感じながら、皆さん一人ひとりの「∞（無限）の可能性」について考えていました。人にはそれぞれ得意なことがあります。運動が得意な人、歌が得意な人、人を楽しませることが得意な人、仲間を支えることが得意な人。それぞれがもつ力は決して同じではありません。しかし、その力や思いが一つになったとき、想像以上の大きな力が生まれます。体育の部でもそうでした。一人の力だけでは勝てない競技がたくさんありました。クラスや団が心を合わせることで、大きな成果につながりました。私はその姿を見て、「人の可能性には限界がない」と改めて感じました。皆さんの中には、まだ自分でも気づいていない力がたくさん眠っています。そして、その力は挑戦することで、仲間と協力することで、さらに大きく伸びていくのです。

次はいよいよ合唱の部です。上記でも伝えましたが、9日にはリハーサルがあり、13～15日は最後の仕上げの期間となります。実は、この時期が一番伸びる時です。これまで積み重ねてきた練習がつながり、一人ひとりの意識が変わり、クラスの心がそろい始めることで、合唱は大きく成長します。歌声そのものだけではなく、聴く人の心に何を届けるのか。自分たちはどんな合唱を創り上げたいのか。その思いがそろったとき、合唱は単なる「歌」ではなく、人の心を動かす作品になります。

私は、皆さんがこれからの一週間でどこまで成長するのか、とても楽しみにしています。一人ひとりの力は無限大。クラスの力も無限大。そして、七条中学校の可能性も無限大です。皆さんがもつ「∞（無限）の可能性」を信じています。16日の合唱の部で、その素晴らしい力をぜひ聴かせてください。きっと私たちの想像を超える歌声に出会えることを楽しみにしています。

裏へ

秋を告げる香りの謎 ～キンモクセイはなぜ咲くのか～

金木犀の香りがどこからともなく漂い、秋の訪れを感じる季節になりました。皆さんも一度は、「あっ、金木犀の香りだ」と思ったことがあるのではないのでしょうか。私はこの香りがたまらなく大好きです。

私はふと疑問に思いました。「金木犀は何のために花を咲かせているのだろうか？」普通、植物は花を咲かせ、受粉し、実をつくり、その中に種を残します。しかし、私は金木犀の実を見た記憶がありません。皆さんはどうでしょうか。ここから私の好奇心が生まれ、少し掘り下げてみました。

調べてみると、キンモクセイはもともと中国原産の植物で、雄木と雌木が別々に存在する「雌雄異株」の植物でした。本来は花を咲かせ、昆虫を呼び寄せ、受粉することで実と種をつくりまします。ところが、日本で見られるキンモクセイの多くは雄木であるため、受粉できず実がならないとされています。

ここでさらに疑問が生まれます。「実もできないのに、なぜあれほど強い香りを放つのだろうか？」花の香りは、人間を楽しませるためではありません。本来は昆虫へのメッセージです。「ここに花がありますよ」「蜜がありますよ」と知らせ、花粉を運んでもらうためのものです。キンモクセイもまた、子孫を残すために香りを進化させてきました。ところが日本では、その本来の目的とは別の理由で生き残ることになりました。

キンモクセイと日本人

キンモクセイは中国から日本へ伝わった植物です。一般には江戸時代頃に渡来したとされ、香りの良さや花付きの良さから庭木として広く植えられるようになりました。日本に入ってきたものは花の多い雄木が中心だったため、それが挿し木によって全国へ広がったと考えられています。つまり、日本中のキンモクセイの多くは、種から増えたのではなく、人の手によって増やされた仲間たちなのです。

考えてみれば不思議です。野生の植物であれば、種を残せなければやがて姿を消してしまいます。しかしキンモクセイは違いました。人々は、●秋を知らせる香りを愛し●家の庭に植え●学校や公園に植え●挿し木で増やし続けました

その結果、キンモクセイは種をつくらなくても全国へ広がっていったのです。植物の生存戦略としては少し特殊ですが、人間との共生によって生き残った植物と言えるかもしれません。

探究の視点

ここで皆さんに問いを投げかけたいと思います。●キンモクセイの香りは、誰のためにあるのでしょうか。●実をつくらないキンモクセイは、植物として成功しているのでしょうか。●人間に愛されることで生き残った生物には、ほかにどのようなものがあるのでしょうか。

私たちは普段、金木犀の香りを「秋らしい」と感じます。しかしその香りの背景には、植物の進化、昆虫との関わり、そして日本人が長い年月をかけて育んできた文化や歴史が隠されていました。何気なく漂ってくる香りにも、実はたくさんの謎があります。「なぜだろう？」と疑問をもつこと。そこから調べ、考え、新たな問いを見つけること。それこそが探究の第一歩なのだと思います。